

資源国ソブリンサッカーの台頭と油価下落

資源国の存在がサッカー界全体を席巻している。昨年、ワールドカップ（以下、W杯）が開催されたブラジルは鉄鉱石・アルミニウムの輸出品世界第二位である資源国だ。現在、W杯開催国は二〇二二年大会まで決まっており、二〇一〇年から二〇二二年までみると、南アフリカ、ブラジル、ロシア、カタールで、これらの国に共通する点は世界有数の資源国ということである。

欧州サッカーは近年、ロシアや中東の資源国による影響が特に顕著である。代表的な例がロシアの石油王に買収されたイングランドのチェルシーやUAEの王族がオーナーを務めるマンチェスターシティ、ソブリンウエルスファンドであるカタール投資庁がオーナーを務めるフランスのパリサンジェルマンだ。

加えて資源国関連企業の動きも目立つ。レアルマドリッドやバルセロナ等、二〇一三〜一四シーズン売上上位二〇クラブの内、約半数の九クラブで資源国関連企業はスポンサードを行った。また日米企業が多くを占めていたW杯のスポンサーにおいても二〇〇六年ドイツW杯でエミレーツ航空がスポンサーになったことを契機に二〇一〇年南アフリカW杯、二〇一四年ブラジルW杯とその比率を増やしている。現在の世界、欧州サッカーは資源国のオイルマネーで盛況を呈したソブリンサッカーの時代といえるだろう。

オイルマネーによる影響は欧州だけに留まらない。アフリカの資源国であるアルジェリアや

ナイジェリアは昨年のブラジル大会でグループリーグを突破した。近年のアフリカサッカーの成長の要因のひとつとして、オイルマネーを背景に育成環境を整え、欧州クラブでプレーする選手を輩出しつつあるという事が考えられる。

アジアでは、アジアサッカー連盟（以下、AFC）における中東諸国の影響力が大きい。最近ではリオデジャネイロ・オリンピックのアジア最終予選を兼ねるU-23アジア選手権がカタールで開催されることに決まった。カタールは予選免除で最終予選に参戦、かつホームで戦うことができる非常に有利な条件といえ、日本などの東アジア諸国には地理的にも環境的にも負担が強いられる。

しかし、日本にもアジア基盤がある。Jリーグは発足から短期間で大きく成長し、現在、東南アジアをはじめとしたアジア諸国から注目されている。三浦俊也氏のベトナム代表監督としての成功はJリーグのアジア戦略成功の象徴といえる。

こうしたなかで起きた油価下落。加えて中東はイスラム国（IS）の影響も見逃せない。このような背景により中東情勢が大きく乱れることは予見でき、オイルマネーに大きく依存している欧州、世界のサッカーにおいてこれらは波乱要因になりうるだろう。しかし、日本サッカーにとつてはAFC内で影響力を強める絶好の機会である。資源国はどういう戦い方をしていくのか、原油価格の推移という国際政治を通して、今後もサッカーに注目していきたい。

ひらた・たけお

通商産業省（現経済産業省）にて在ブラジル日本大使館一等書記官、石油天然ガス課長などを歴任。その後、日本サッカー協会専務理事。現在、早稲田大学スポーツ科学研究科教授、内閣官房参与。